エンタ目

■ 映画「CHAIN／チェイン」■

幕末と現在 結びつける

仙頭 武則

映画は社会を映す鏡である。近年では作品内容を社会の反映、あるいは創作者が考える社会の反映だと捉える「社会反映論」と、受け手が映画に期待や願望を投影する「社会投影論」に区分されているが、ここでは「社会反映論」として用いる。

二〇一一年以降の日本映画を欧州の批評家が語る際には「3・11以降に撮られた映画であるかどうか」が「社会反映論」に連なる言説として定着した。数年後には「ポストコロナ」映画であるかどうかが世界中の映画において論じられることになるだろう。

コロナ禍前の一九年、京都で「CHAIN／チェイン」という映画の製作に参加した。

監督は、巨匠たちの助監督としてその名を知らぬ者はいない達人、監督作も多数、とりわけ前作「正しく生きる」に私はしびれた、尊敬する先輩、福岡芳穂さん。脚本は「あゝ、荒野」「宮本から君へ」など近年活躍目覚ましい港岳彦さん。撮影は「シコふんじゃった。」などの栢野直樹さん。阪本順治監督作を手がけてきた女性プロデューサーの先駆者で、私が勝手に「姉さん」と呼んでいる椎井友紀子さん。「CURE」をはじめ多くの作品を自在に編集してきた愛知県蒲郡市出身の名編集マン鈴木歓さんはじめ重鎮が顔をそろえた。配給宣伝は海外の良作を日本に伝え続けるマジックアワー代表・有吉司さん。私も今や還暦だが、このお歴々を前にすればほんの若造だと安心するやら怖いやら。そんな大先輩たちが京都に集い、「インディーズ映画だ」と取り組んだ。

「CHAIN」を製作した（左から）筆者、栢野直樹カメラマン、福岡芳穂監督

打ち合わせなどとは程遠く、ほとんどは立ち話で、怪しい雰囲気を醸し出しつつ、私と監督は会話を重ねていった。「どうしてCHAIN？」「できごとの連鎖、時間の連なり」「なんでCHAIN？」「鎖＝縛るもの、われわれはさまざまなものに縛られて生きていると。自縄自縛も含めて。恣意的な解釈だけど、つながり、結びつき」「『場所』を、それが持つ『時間』と結びつけ可視化することはできないか」

これが大命題となって製作は進んでいった。歴史ある京都という「場所」の幕末と現在という「時間」を結びつける。会津藩が管理組織していた新選組とそこから離脱した集団である御陵衛士の争い。会津は今の福島県。「CHAIN」はまさに「創作者が考える社会の反映」「3・11以降に撮られた映画」だ。幕末が舞台ではあるが、時代劇を創ったつもりはない。幕末を借りた現代劇と言いたい。

今月二十六日、まずはテアトル新宿から公開が始まる。

（名古屋学芸大教授、映画プロデューサー＝次回掲載は十二月十六日）